



水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十三号

2023/03/31 発行

題字：高橋弘美

ご挨拶

先月の『莊子』からこっち、ずっと中国にいる。面白いのである。まさか中国に興味を持つとは思わなかった。わからないものである。

これまで、気の向くままにキリスト教に行ったりイスラム教を眺めたり仏教に行ったりしてみたが、中国の思想はそのどれともやはり違っている。そしてそれがあんまり自分にぴったりすることに驚いている。三年前の自分に会うことができたとして、おまえは三年後には莊子やら孔子やらを読んで泣いているぞと云っても、向こうは決して信じないに違いない。神のいない世界などわたしには考えられませんか云って。

それはきっと、朱熹のこんな詩にひどく感じ入るようになってしまったことと関係があるのに違いない。自分が健やかによく歳をとっているのだと信じたい。

少年老い易く学成り難し／一寸の光陰軽んず可からず／未だ覚めず
池塘春草の夢／階前の梧葉已に秋声

朱熹「偶成」

今号の内容

学成るに時を要す

ふたつでひとつ

後記に代えて

学成るに時を要す

前掲の朱熹の詩は一般に、年月は瞬く間に過ぎてゆくが、学問というものは完成しづらいものだから、寸暇を惜しんで無駄にはならないよ、という教育というか教訓的な意味合いで読まれるらしいが、そんな予備知識など少しも持ち合わせないで読んだわたしの頭に浮かんだのは、学問の世界に真実に呼ばれるまでに、人はいかに多くの時を必要とするかという、嘆息に似た感覚だった。

わたしたちの多くは、六歳か七歳で学校に入ったとたん、勉強しろ勉強しろと云われて育つわけだが、その勉強なるものに一体なんの意味があるのか、そもそもいま勉強しているものは一体なんなのか、そうしたことがほんとうにわかって、自分のこととして生きてくるには、それからずいぶん長い時間がかかるのに違いはない。

中学高校と、古典が大嫌いだった。古文も嫌いだったが、漢文はもっと嫌いだった。なにをやっていた

のかまるで理解できなかったのである。はじめて漢文に触れた中学生のわたくしが抱いた感想といえ、**「中国語がわからないでどうやって中国の文章など読むのだ」**なる、身も蓋もないようなものだった。

カリガネ点だの上中下点だのといって中国語を無理やり分解して日本語で読むという、そのあんまりといえばあんまりな仕組みというか発想がまったく理解できず、なんだって別の言語をこんなふうにして読まねばならんのだなどと怒りまでわいてきて、もうまったくやる気を失ったのを覚えている。古典も似たようなもので、日本語なのにすら読めないというそのもどかしさが腹立たしく、おまけに最初に読んだのが『枕草子』だったと思うが、行間から漂う清少納言の自意識みたいなものが絶望的に自分と合わなかった。

作者が嫌いだから古典が嫌いというのもずいぶんなものだが、子どもなんてそんなものではないか。紫式部なら手放しで好きになれる気がするが、そう思えるようになったのも最近のことであって、こんなところからもわたしという人間の輪郭や愚かさがわかるような気がする。

ところでは、漢文が非常に面白い。訓読の技術にこめられた先人の努力や心意気が、いまならばよくわかるような気がする。漢字という文字を共有しているおかげで、まったくの外国語相手にこのよ

うな特殊な読み方が通用するというのありがたいことである。日本語と中国語はまったく違う言語のはずだが、文法の学習などすつ飛ばしてもなんとか相手を理解できるといえるのは、わたしのように規則的な学習が大嫌いな生徒には願ってもないような技である。

こんなことを書きながら、なにやら名状しがたい感慨のようなものが湧いてくるのを感じる。というのも、学校で最初に漢文を教わってから二十年以上も経ってはじめて、自分がその学問に意義を見出したわけである。こういうことがどうして起きるのか、ちよつと人の頭ではわかりそうにない。我ながらずいぶん手間どったものだと思うし、同時に歳をとったものだとも思うのだが、しかし人間というのはそういうものだろうとも思う。少年老い易く、学成り難し。人は瞬く間に老いてゆくが、知とおのれとが運命的な出会いを果たして、その関係が成就するまでには長い時間がかかる。

学校で教わるいわゆる勉強は、あきらかに外的なものとしてやってくる。こっちはそんなこと知りたいたとも思っていないのに、一方的に押しつけられる知識など、よほどの人でないかぎり迷惑なだけだろう。実際迷惑な話である。だがそれから何十年も経って、ある日ふと、赤の他人のはずだったその知を自分が欲していることに気がつく。自分が呼びかけ、

相手もまた自分を呼んでいると思う。そのとき手にするテキストは、もう学生時代の教科書とはまるで別の様相を帯びて見える。以前は自分となんの関係もないように思われた、なんの感情もわかかったテキストの中に、親しいものが、美しいものが、偉大なものが宿っているのを感じ、それが自分に話しかけてくれていると思う。少年老い易く、学成り難し。わたしはもう青年ではない。思春期はとうの昔に過ぎ去り、老いは少し先に控えてわたしを待っている。「学成る」ことを、学とおのれとがひとつの有機的な個人的な関係を結べるようになることだとすれば、あの若き惑いの日々から何十年もの歳月を経て、それが成就することの喜びと不思議とを、かつての賢人もまた感じていたとすれば。

家の物置に、高祖父の書物がいろいろと残っている。高祖父は雅号を「狩野豊信」といった。書も画もよくする人だったらしいが、このあいだこの人の蔵書の中に「千字文」があるのを見つけた。天保とあるから、江戸の末期に出版された本に違いない。「千字文」は異なる千の漢字を使って作られた詩で、書の手本として用いられるのだそうだが、ばらばらめくっていたらなんだか書きたくなかったので、祖父の書道用具を持ち出して書いてみた。習字は習ったことがないし、書道に深い関心を持つたこともないのだが、筆と墨という道具を通して、

自分のまだ知らない、しかし自分のうちに確かに眠っている東洋の身体というものが、自分に微笑んだ気がした。あるいは、高祖父が嘲笑を投げたのだろうか。この人の蔵書は幅広く面白いのだが、「支那文学案内」だの「唐詩選」だのいうのもひと通りそろっていて、どうもわたしは自分ではなんにも買わなくていいようだと思った。必要なものはない家のどこかにあるので、わたしという人間はそういうふうにできているらしい。

この高祖父の長男は頭のいい人だったようで、家を出て漢方の大家、浅田宗伯の弟子になった。浅田館は、この浅田宗伯の家に出入りしていた書生さんが作った葉館がもとになっているそうであるが、ともかくこの長男は、その後無事漢方医になり、大阪に住んで、膨大な蔵書と書画のコレクションを所有していたようである。それがなんと岐阜県の「内藤記念くすり博物館」というところに保管され、一般にも公開されているのをこのあいだ発見した。これもまた不思議なめぐりあわせである。同館が公開しているこのPDFには顔写真まで掲載されている。その顔立ちはどうも我が家のほうでなく、この人の弟が建てた別家のほうに似ているようである。

最近こんなことが続いて、なんだかよくわからなかった自分というものが、実は大いに遺伝の産物であり血の産物であることを感じている。誰しも歳をとることになぜか肉親によく似てくるように、人は

歳をとるごとに、自分の存在がこの地上に、存外頑固に根を張っているのを感じるようになるのだろうか。自分がいつたいなんなのかよくわからないで苦しむのが若者だとすれば、それを過ぎたあとにやってくるのは、とつくの昔に知っていなければならなかったはずのことをいまさら知る羽目になる中年の、妙なこそばゆさと安堵とであろうか。

ふたつでひとつ

よりによって自分が中国に夢中になっているときに、我が国の総理大臣が妙な形で中国と対立する羽目になってしまったのは面白かった。三月二十一日にウクライナを訪問した岸田首相と、時を同じくしてロシアを訪問した習近平国家主席とは、なにか劇的な形で双方の立場の違いというものを明らかにしてしまっただが、この対立が、まことに光と影のように見えて面白かった。

中国を知れば知るほど、その懐の深さと成熟しきった思惟方法とに感嘆の念を禁じ得ない。こんな云い方は横暴かもしれないが、中国は老獪な、一筋縄でいかないじいさんである。その頭の使い方は実に複雑で、というのもこのじいさんは、そもそも現実というやつは複雑怪奇を極めたもので、互いの云い

分や利益は往々にして衝突し、どうしたって簡単に
いかないことを心憎いほど心得ているのである。

中国の公案小説（裁判物語）にこんな話がある。
昔、滕大尹^{とうたいいん}という名裁判官がいた。ある日、ひとり
の男が、亡くなった親の遺言で一本の軸を滕大尹の
もとへ持ってきた。滕大尹が軸の仕掛けを見やぶっ
て紙を剥がしてみると、「土蔵の左側の壁に金の入
った壺五つを、右の壁に銀の入った壺五つを塗りこ
めてある」と書いてあった。

この軸を持ちこんだ男には兄がいたが、これが欲
の深い性格で、両親は自分たちが死んだら、きつと
この欲深い兄が弟の取り分をも自分のものにしてし
まうだろうと思つて、密かにこんな工夫をこらして
いたのである。

これを受けて滕大尹はどうしたか。兄弟を呼び出
し、このように命じたのである。

「おまえたちの親の霊があらわれて、土蔵の左右の
壁に五つずつ、宝の入った壺を塗りこめてある、つ
いては右の壺を兄が、左の壺を弟がとり、弟分のひ
とつをわたしが取るように、と云われた。さつそく
実行せよ」

こうすれば、欲張りの兄貴は、自分が壺五つで弟
が四つなのに満足し、弟は金を取るようになるから
もちろん満足し、滕大尹も金の壺ひとつを得て得を
し、結果みんなが満足するという算段である。

思わずうなつてしまふような妙案だが、日本で同

じことが起こるとどうなるか。おそらく善良な日本
人は、欲の深い兄貴がお代官様の叱責によって改心
させられるとか、心憎い計らいでぎゃふんといわさ
れるとかいう結末にならなければ満足しないような
気がする。少なくとも、欲深くて両親の心を悩ます
ような兄を多少なりとも懲罰しないでは、あまりす
つきりしないに違いない。

こういう感情的な決着を求めるところに、日本人
の日本人らしいところが現れている気がする。日本
人はどうも潔癖なところがあつて、白黒をはつきり
つけたがる。いいならいい、悪いなら悪いでどつち
かに決めないと気が済まないというようなどころが
あるけれど、中国人は、そうはつきり白黒つけられ
るほど現実には単純でないということをよく飲みこん
でいる。現実の人間は皆おのおのくせがあつて欲が
あり、自分の利益を求めめるものである。立場が変わ
ればなにが利益であるかも変わるし、なにが善か悪
かということだつて、見方が変われば変わつてしま
う。

だから、兄貴の悪い性質を矯正しようとか、善良
な弟が得をするようにしようとかの価値判断を持ち
出すのではなくて、どうすればみんなが満足するか
考える。裁き手の滕大尹が、決して清廉潔白な人
ではなく、自分もちやつかり得をするよう計らつてい
る点も見逃せない。彼は自分の利益をもちやんと勘
定に含めるのであつて、また当然含めてもいいので

ある。彼もひとりの人間であり、報酬や利益を求め
るものだからだ。裁判官だからといって無私無欲の
人になどなれるものでないし、そんなことではそれ
を求めるほうも求められるほうもいづれ疲弊する。
そんなやり方は、現実の人間というものを無視した、
都合のいい、ある意味では子どもっぽい理想論に過
ぎず、なかなか長続きしないのである。

中国人の考え方の特徴として、「ものごとを一面
的に見ない両面的な思考」ということを、岩波文庫
版『莊子』の訳注を担当した金谷治氏などは述べて
いる。ものごとを単純に割り切ることをしないで、
表があれば裏があり、欠点があれば長所もある、そ
れが生きている人間の現実であり現実の世界だとい
うことを、中国人はそもそもその前提として受け入れ
ている。それを持ち前の潔癖さから、卑怯だとかい
けないとかいつて否定してかかりがちなのが日本人
だとすれば、現実的な中国人は、それらをまるごと
受け入れ、その上でどうするのが一番いいか考える。
長い歴史と多くの民族を有し、何度も王朝の転覆や
革命を経験してきた大国の知恵といえるだろうか。

もうひとつ、『史記』に出てくる話をご紹介しよ
う。
春秋時代の楚の国に、伍子胥^{ごししよ}という人物がいた。
父と兄とを楚王に殺され、のちに復讐を遂げる人物
だが、ある日父親が罪もないのに讒訴され、国王に

捕らえられてしまう。父親を陥れた首謀者は、ふたりの兄弟も一緒に殺してしまわないと後の禍になると王に進言したので、王は使者を派遣して、「ふたりが出頭したならば父を生かしておくが、出てこなければ殺す」と触れ回らせた。

伍子胥はこれが皆殺しの計略であることを見抜いて、自分たちが出頭しようがしまいがどうせ父は助からないのだから、いまはひとまず逃げ延びて、のちに仇を討ち父の恥をすすごうと兄に云う。しかし兄は静かに、

「わかっている。だが父を助けると云われながらそれをふり切り、仇を討つためと云っておきながらそれも果たせなければ、天下の笑いものになる。おまえは逃げて仇討ちを果たしてくれ。おれは父のもとへ行って死ぬことにする」

こうして兄は捕まり、伍子胥は囲みを破って逃げ延びて、のちに仇討ちを果たすのである。

この場合、兄と弟とはともに同じ考えを抱いているわけだが、弟が愚直にそれを実行に移そうとするのに対して、兄は世間的な倫理や道義のことも忘れずに考えに含めている。仇討ちという父に対する義務を果たそうとすれば、その父を見殺しにすることになって道義に反することになるが、その道義というやつを守ろうとすれば全員犬死にすることになるという、この究極の選択めいた場面において、兄は両方をうまく満たすやり方として、役割を分担する

という方法をとるのである。

こういう究極の場面は文楽なんかに出てきそうだが、この場合、日本における筋立てはどうなるかと考えてみると、わたしなら兄弟ともに父のもとへはせ参じて殺されることにし、仇討ちは兄弟の息子あたりで託しそうだ。むぎむぎ殺されるとわかっていながら、それでも父を見殺しにすることはできないと命を投げ出す筋書きのほうが、観衆の涙と義憤とを誘うことができるわけで、未来の仇討ちの主人公たる人物への感情移入も増すというものである。

日本においては、道義や世間体のようなものは、それに呻吟し圧殺される感情というものがあるから生きてくるのに違いない。自己の欲求と義理とのあいだで、理想と現実とのあいだでうめき苦しむ人間はあわれで美しい。その苦しみが報われたとき、あるいははかなく散ったとき、日本人は深く心を動かされる。

これは明暗のかなりはつきりした世界である。日本人は明確なドラマを求める。感情が報われることを、善が報いられることを、勸善懲悪を求める。あるいは無常なる思いのもとに、すべてをはかなんで捨て去る。わたしたちは潔くて根が単純だ。一体感が大好きで、すぐに心を動かされ、みんなしてがむしゃらにつっ走って、実は問題が全然解決していかなくても、感情的にやった気になって満足すればそれでよしとしたりする。なんとも浮ついた、愛すべき

民族である。真の意味での問題の把握や解決は、たぶんわたしたちの苦手とするところだ。ところがその横に、したたかに構えた、複雑な問題解決を得意とする民族がいるのである。

若いころ、善と悪とを厳しく裁く神を求めた。自己という悪をどうやって切り捨てるかは、わたしの全生命をかけた一大問題だった。いかに自己を消し去るかということが、わたしの生死を決するかのような問題だったわけだが、しかしいまはそんなことをあまり思わなくなっている。よい面も悪い面も自分であり、しかもそれらは単に相対的なものである。悪とはなにか、善とはなにか。人はいかにしてより善くなりうるか。それを真摯に追求することは、確かに人間の大きな課題であるに違いない。

しかしわたしが二十年以上も心血を注いでわかったことといえば、人間はもつと総合的複合的な存在であって、自身のうちに多くの価値判断や矛盾を含みながら、同時にそれを超えた存在であるということだ。荘子のいう「道」の真理は、なにかそんなことを、山中の澄んだ湖面のようなものに映してわたしに見せてくれた。

次の瞬間には、この湖に鳥がやってきて水面を波立たせ、また次の瞬間には魚が水底の泥をすくい上げながら跳びはねたりして、そういつも清澄に澄みわたって美しいというわけでもないのだが、この湖

は別にそんなことを気にしているわけではなく、ときどきは子どもたちが魚を捕りにやってきて、盛大に泥をかき混ぜたり水をせき止めたりしてなかなかひどいことにもなるのだが、それはそれで別にかまわない。この湖はそういうすべてを愉快に感じていて、それを楽しんでる。いずれ冬が来て薄氷が湖面を覆い、すべてが死に絶えたような冬が来る。その静けさもまた愛すべきところである。凍った水面下では、さまざまな生き物が春に向けてもう準備をはじめている。生命が芽吹き、咲き誇り、また枯れる。たぶんそれを道という。そしてわたしはその道の一部だ。さまざまな矛盾や葛藤や欲望を抱えた、ひとりの愚かしく弱い人でありながら、同時にわたしはどうあってもその卑小さに埋没しきれない、それらを超えた偉大な摂理の一部だ。

よくも悪くも中国は大きい。潔癖で単純な日本人なる民族の横に、こんな複雑な思考を好む地に足ついた大人な民族が控えているとは、なんとも頼もしいではないか。もちろん、中国人の現実主義が独特のつきあいにくさを産むのは間違いないだろうし、おまけにいまは共産主義体制下にあるとあっては、互いに仲良く交流しようなどとは、かなり困難なことに違いない。

しかし彼らはやはりわれわれ日本人にとって、懐かしい尊敬すべき人たちなのに違いない。中国の文

字を真名といい、おのれの文字を仮名といい、訓読法を開発してまで中国の思想に親しんできたのは、やはり伊達でない。きつとわたしたちは、互いに切り離せないコインの裏表のようなものなのだろう。陰と陽であり、光と影である。そのときどきでそれは入れ替わり、混じり合い、ひとつの大きな流れを作る。わたしたちはお互いに、相手にないものを見える。それがすぐお隣どうしで住んでいるとは、この絶妙な采配は、いったい誰の仕業であろう。

後記に代えて

窓の外をムクドリが歩いている。芝生を鳥がうろつく季節になった。庭木につげの木を植えているのだが、それが鳥のいい遊び場になっている。

鳥は不思議な連中である。気ままにしているようで人のことをちゃんと見ているし、犬猫のように飼いや慣らされたりはしないいつでも自由なのだが、だからといって別に人間になど我関せずというわけでもなくて、ちゃんと共存していたり、ちゃっかりこちらを利用していたりする。

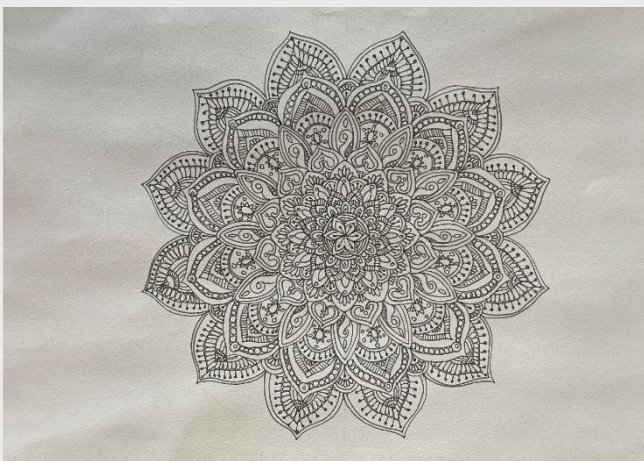
でも彼らは自由だ。永遠に自由なのだ。好きに飛び、好きに羽ばたき、好きに遊んでいる。ときどき

は、すぐそばで歌ってくれることもあるし、飛び方を見せてくれることもあるし、こつちをからかうこともある。だからつきりもう友だちになったのだなと思うと、さつと逃げてしまったり、知らんぷりを決めこんだりする。愛らしくて、とらえどころがなく、憎めないやつで、不思議な距離を保ってつきあっている、鳥のやつがやっぱり好きである。

二〇二三年三月三十一日

水澤雪下

<https://nijibms.com/>



最近マンダラアートなるものをやりはじめた。これはわたしの初期の作品で、あまり出来映えがよくないが、こんなことをやっていると、マニエリスムの迷宮にでも迷いこんだ気持ちになる。